



Kobe Shoin Women's University Repository

KARASHI-DANE

諦観(あきらめ)語彙考

著者	吉井 健
著者別名	YOSHII Ken
雑誌名	文林
巻	43
ページ	63-84
発行年	2009-03-10
URL	http://doi.org/10.14946/00001583



諦観（あきらめ）語彙考

吉井健

一 あきらめ語彙の概観

① 白たへに 舍人よそひて 和東山 御輿立たして ひさかたの 天知らしぬれ こいまろび ひづち泣けども
せむすべもなし（万葉集四七五）

② かくばかり すべなきものか 世の中の道（万葉集八九二）

これらの歌のように、重要性をもつ事柄において、自分の力では状況の打開・改善ができないと感じた場合、すなわち、望ましい事態の実現が人為ではコントロールできず、おぼつかないと感じた場合、典型的に「あきらめる」ということになる。

③ 新中納言「見るべき程の事は見つ、いまは自害せん」とて、めのと子の伊賀平内左衛門家長をめして、「いかに、約束はたがうまじきか」との給へば、「子細にや及候」と、中納言に鎧二領させ奉り、我身も鎧二領きて、

手をとりく(シ)で海へぞ入にける。(平家・卷十一 内侍所都入)

これも「あきらめ」を描いているが、新中納言知盛が自害を決心するに至るまでには一定の期間を要している。「見るべき程の事」を見ることを通して「あきらめ」に至っているのである。「あきらめる」前提としては、通常、一定時間の経過、一定時間の打開への努力といったことが必要である。¹⁾

さて、こうした諦念・断念に至ることを表す動詞としては、「あきらむ」「観念す」「覚悟す」など、現在でも「あきらめる」意味で用いられているものがある。すでに知られているように、これらの語は元来は断念を表すものではなかった。むしろ、古典語では、「思ひたゆ」「思ひすつ」「思ひはつ」など、「思ふ+X」という形で断念の意味をもつものがあり、そういう語彙が、いわば「あきらむ」等の代わりをはたしていた。本稿では、これらの語の意味の拡がらないしは変遷を述べ、その共通点相違点を探る。そうして日本語において「あきらめ」がどのように捉えられてきたのかについても、少し考えてみたい。

なお、「見かざる」「見きる」も扱うべきであるが、ここでは詳しく扱えなかった。さらに「断念する」という語についても扱っていない。また、本稿は動詞を基本として考えており、「思い切って」「いっそ」など関連ある副詞については別の機会に考えたい。

二 「思ふ+X」の形の語彙

まずは動詞「思ふ」に動詞が後接して「あきらめ」を表す語を取り上げる。これらは基本的に「あきらめ」を専ら

表すわけではなく、文脈上のように解釈できるというものである。

【思ひたゆ】

①旅なれば思ひ絶え（於毛比多要）てもありつれど家にある妹し思ひかなしも（万葉集三六八六）

②女、もの思ひ絶えぬを、親はよろづに思ひ言ふこともあれど、世に経んことを思ひ絶えたり。（源氏・滯標）

③今はと思ひたえつるあたらしさにひきかへ、うれしきことに思ひたる事かぎりなし。（夜の寢覚 巻五）

①は、新羅に派遣された使人の歌で、肥前国松浦郡で停泊し、これから外海に漕ぎ出そうという時に詠まれた歌である。好むと好まざることにかかわらず、妻への思いは詮ないものといちおうは思い定めていたが、いよいよ波高い海に出ると思うと、妻のことが愛しく悲しく思われるという歌である。②は女が源氏を思って物思いが絶えないので、親がいろいろ縁談をもちかけるが、女はふつうの男性と結婚することを承諾する気持にはなれないのである。①が自動詞的であるのに対し、②は他動詞的である。③は寢覚上が内大臣に引き取られることになり、出家をしたときに、今はこれまでと断念した口惜しさにひきかえて、うれしいというのである。基本的にはある状況で思いを断つことになることを表したと思われるが、いずれも文脈的に「あきらめる」と現代語訳しても差し支えないものである。

【思ひすつ】

④うきものと思ひ棄てつる世も、今はと住み離れなんことを思すには、いと棄てがたきこと多かる中にも、姫君

の明け暮れにそへては思ひ嘆きたまへるさまの心苦しうあはれなるを、（源氏・須磨）

⑤たまづさを今は手にだにとらじとやさこそ心はおもひすつとも

今は此世にてあひみん事もかたければ、いきてものをおもはんより、しなんとのみぞねがはれける。

(平家・巻六 小督)

④須磨へ行くことを決意した源氏が、何かにつけ思い通りにならないものとあきらめていた世だが、いざ都を離れるとなると、棄てがたいことが多く、殊に紫の上のことが思われるというもの。⑤はかつての恋人である少将の投げ入れた歌を小督があえて見もせず投げて出したことに対して、少将が詠んだ和歌である。この場合、「思ひすつ」は「心の中で捨て去る」「考えることをやめる」といった意味である。むしろこれが主たる意味であって、④も同様に考えることができる。

【思ひはなつ】

⑥尚侍の君、なほえ思ひ放ちきこえたまはず。こりずまにたち返り、御心ばへもあれど、女はうきに懲りたまひて、むかしのやうにもあひしらへきこえたまはず。(源氏・濡標)

⑦「身に、ことに思ひなやむことも侍らず。こどもとて侍れど、男どもは、「宿世にまかせてあれ」と、もとより思ひはなちたれば、心やすく侍り。……」(夜の寝覚 卷二)

⑥源氏は尚侍の君をなおきらめきれないというもの。⑦は出家に際して子どもがあるが、男の子は「宿世にまかせてあれ」と、もとから出家の思いを妨げるものからはずしているので、心やすいというものである。「思ひはなつ」の場合も、⑦の意味がベースであって、文脈により、⑥のように「あきらめる」の理解を受け入れる。

【思ひきる】

⑧ 大方は入道、院がたの奉公おもひき（ッ）たり。（平家・巻二 教訓状）

⑨ 恩愛の道はおもひきられぬ事にて候也。いけどりのうちに八歳の童とつけられて候しものは、いまだ此世に候やらん。今一度見候ばや。（平家・巻十一 副将被斬）

⑩ こぞの冬の比鎌倉をいでしより、命をば兵衛佐殿にたてまつり、かばねをば一谷でさらさんとおもひき（ッ）たる直実ぞや。（平家・巻九 一二之懸）

⑧は、法皇が平家追討の院宣を下すおそれがあると感じた清盛が、院がたへの奉公を打ち切ることに決めたという例である。⑨は生け捕りにされた八歳の息子に宗盛が面会を求めている。恩愛の道とはここでは親子の情愛である。それは断ち切ることができないというのである。これは「あきらめる」という理解も受け入れる。⑩は一命を賭けて手柄を立てることに以外は考えないよう心を決めたというものである。（手柄を立てずに）生きるという選択肢を切り捨てたわけで、「あきらめる」という理解も受け入れるが、むしろ、討ち死にするという望ましくない可能性を受け入れるという点で、後に述べる「覚悟する」という意味にも解釈できる。

【思ひかぎる】

⑪ 「今は、かかる方に、思ひかぎりつるありさまになん。心のおもむけもさのみ見えはべるを」など語らひたまふ。（源氏・手習）

⑫ 「思ひかぎりたるすまるなどの、草の庵はづかしきさまなるを、見えしられたてまつらんも（中略）」と、はゞ

からはしうおぼせど（浜松中納言 卷三）

⑬ うち頼みて、かりそめに、行き方を思ひ限らんことは、あさましく思ひながら（狭衣 卷一）

⑭の「かかる方」とは仏道をさす。浮舟の出家について仏道に専念することに心を決めたと思受けられることを述べている。基本的な意味は、さまざまある思いを一つに限るということかと思われるが、あるいは、通常の望ましい思いに限界を設けてそこで思いとどまるという意味かもしれない。後者の場合、「思ひきる」と共通性が高くなる。

実際ここには「思ひきる」の異文がある。⑫はこの世を捨てた住まいという内容であろうから、「あきらめる」の解積を受け入れる。⑬は飛鳥井姫君が、狭衣を頼みとして東国に行くことを思いとどまることは我ながら不安であると煩悶する場面である。ここは「思ひとまる」の異文もあり、むしろそちらが解釈しやすくはある。

【思ひとまる・思ひとどむ】

⑭ 消息申ししを、御悩みにことつけてもの憂げにすまひたまへりし、げにをりしも便なう思ひとまりはべるに、よろしうものせさせたまひければ、なほかう思ひおこせるついでにとなむ思うたまふる。（源氏・行幸）

⑮ 「山あなたの住まひも、なほえ思ひとまるまじき世にこそ」などのたまへば、（浅茅が露）

⑯ かへすがへすあるまじきことにわが御心にも思せど、かうまでうち出でたまへれば、え思ひとどめたまはず。

（源氏・浮舟）

⑰は、源氏が玉鬘の裳着を行うべく内大臣に依頼したところ、内大臣が先方の病気を口実に交渉が思うに任せないことをいう会話文である。先方が病気にかこつけて断るので、思いを貫徹することなくとどまったということである。

⑮は、山に隱遁する生活も思いとどまることができないような世だというものである。⑯は、匂宮が宇治に行くことを、あるまじきことと自覚しながらも、思いとどまることができないというのである。いずれも現代語の「思いとどまる」に通じるが、望ましい事柄に関する⑭⑯は「あきらめる」とも接点をもつ。

【思ひやむ】

⑰人はよし思ひやむ（念息）とも玉かづら影に見えつつ忘らえぬかも（万葉集一四九）

⑱大臣の御心のいとつらければ、さはれ、思ひやみなむと思へど、恋しうおはせむこそ理なかるべけれ。

（源氏・少女）

⑲「人の許さぬあたりに、身の程知らぬ文など落ち散るは、をこがましきこと」と思しかども、身の上になりては、え思やむまじきわざなりけり」（狭衣 卷四）

⑰は天智天皇の挽歌だが、ほかの人は思うことをやめることがあっても、私は亡き天皇を忘れることはないという内容である。⑱は父内大臣の許しが得られそうにないので、夕霧は雲居雁を思うのをやめようと思っけれども、そうになると恋しくてたまらなくなるだろうというのである。⑲は親の許さぬ相手に手紙を送るのは、おこがましいことだと思いつつも思いを断つことはむずかしいという例である。⑰は自らと対比的に見た第三者の思いなので、「あきらめる」の意味からは遠いが、⑱⑲は自ら恋しい思いをおさめることが話題になっており、「あきらめる」という解釈も受け入れる。

さて、ここまで見てきた「思ふ十X」の語彙は、「思ふ」に後接する動詞が「たゆ・すつ・はなつ・きる・かぎる・

とまる・とどまる・やむ」のように、概してあるところで思いを限定し、あれこれと物思うことを打ち切る意味をもったものであった。こうした語構成の語彙が「あきらめる」意味になることは理解しやすい。ただし、ここで注意しておきたいことは、あれこれと物思うことを打ち切る意味というとき、思うことは相当期間持続してきたものであるということである。そのことに注意しておいて、もう一つ、「思ふ+X」の形の語を見てみたい。

【思ひはつ】

⑳暮れはてぬれど、「誰と聞かざらむほどはゆるさじ」とてなれなれしく臥したまふに、宮なりけり、と思ひはつるに、乳母、言はむ方なくあきれてゐたり。(源氏・東屋)

㉑とはせたまはぬもことわりに思ひたまへながら、今はと世を思ひはつるほどのうさもつらさも、たぐひなきこととこそはべりけれ。(源氏・須磨)

㉒かばかりとおもひはてにし世中になにゆゑとまる心なるらむ(新勅撰一一四一)

㉑は、立ち居振舞いの様子から浮母に言い寄っている相手が匂宮であると思いついて、乳母が困惑している場面である。㉑は源氏が須磨に退去するにあたって朧月夜に宛てたことばで、失意の中にあつて、世の中もここまで思うに至つたという内容である。㉒も同じような内容である。これらの場合「あきらめる」という理解をすることも可能である。「思ひはつ」自体は、基本的には㉑のように、思いの果てにある結論にたどり着くことを表すものだと考えられる。㉑㉒にもこの基本的な意味は生きている。ただ、思いの果てにたどりつく結論となると、重大性を帯びることが多く、「思ひはつ」は㉑㉒のような文脈に用いられることが多く、結果として「あきらめる」と理解できる例が

多い。「思ひはつ」は、結果的には「思ひたゆ」などと似る面があるが、思いが行き着くところまで行ってそれ以外に考えられなくなるという点で少し違っている。思いの限定・中断ではなく、思いの末に自ずから逢着し、知った結論であるという点が違っているのである。違っているとはいえ、偶然意味が重なるというだけではないだろう。物思いが相当期間保持され、その中からの限定・選別が行われて思いを切ることが、思いをつきつめて結論に達する「思ひはつ」と、その実態において共通性をもつのである。

したがって、この語が「あきらめる」意味をもち得ることは、さほど不思議には思われない。ただし、こうした語（「思ひはつ」）が「あきらめる」というような理解に傾斜していることは、後で見ると「あきらむ」「観念する」「覚悟する」が「あきらめる」意味をもつ背景を形成していると考えられ、注目されることである。⁽²⁾

三 あきらむ

「あきらむ」が元来断念を意味する語でなかったことは広く知られている。この語が断念をあらわす経緯の詳細についてはすでに遠藤好英氏の一連の論考がある。詳細はそちらに譲るが、本稿の必要の限り、この語が「あきらめる」意味を獲得する経緯を追ってみることにする。

①しかれども 我が大君の 諸人を いざなひたまひ 良きことを 始めたまひて 金かも たしけくあらむと
思ほして 下悩ますに 鳥が鳴く 東の国の 陸奥の 小田なる山に 金ありと 申したまへれ 御心を あ

きらめたまひ（万葉集四〇九四）

② 嘆かしき心の中もあきらむばかり、かつは慰め、また、あはれをもさまし、さまざまに語らひたまふ。

(源氏・早蕨)

① は陸奥の国から金が出た寿ぐ歌で、天皇が心を明るくなさったというものである。② は、匂宮と話をするうち、心が晴れてきたというものである。直後にある「げに、心にあまるまで思ひむすばほることども、すこしづつ語りきこえたまふぞ、こよなく胸のひまあく心地したまふ」という部分が参考になる。このように、「あきらむ」はまづは「心を明るくする」といった意味で用いられたようである。それに続いて、次のような意味に展開したらしい。

③ ただ御消息などにて、この程のおぼつかなさあきらめさせ給へ(夜の寝覚 卷四)

④ 古へより人の分きかねたる事を、末の世に下れる人の、えあきらめ果つまじくこそ。(源氏・若菜下)

③ は手紙などで、ご心配を晴らしてさしあげてくださいということ、①②と通うところがある。しかしながら、事情が分からないで心配しているところ、手紙などで事情を伝えて心配を晴らすというように、「知る」ことが重要性をもってきている。④ は春秋の優劣を決めようということ、その優劣は先人が判定できなかったのだから、末世の我々には明らかにできないはずがないというものである。この例になると、かなり知的な面が卓越しており、より「知る」比重が高い。「明らかに知る」「明らかに説明する」といった意味になっていると言っておよい。

⑤ 霍璋ノ云ク「若シ、然ラバ、君自ミズカラ「学ビ浅ク、識リ少シ」ト可陳シ。其ノ時ニ、我レ、其ノ事ヲ相ヒ明MEM」ト。(今昔物語集九・三十)

その才ゆえに冥土の官吏として使おうと召された男が、知り合いの霍璋に助命を頼んだところ、冥土の公に「自分は

浅学で才もない」と答えなさいと助言し、そう言ったら、その委細を霍璋が公に説明して裏付けてやると約束している。ここでも「あきらむ」は、事情をはっきりわかるように説明するといった意味で用いられている。

こうした用法は中世・近世も引き続き用いられる。

⑥ 其ノ末ヲ學ビテ源ヲ明メザレバ、コトニノゾミテ覺エザル過チアリ。（神皇正統記）

⑦ 臨終ニ妄業ニカ、ミズシテ、自在ノ妙樂ヲエムト思ハゞ、行住坐臥、妄念ヲユルサズシテ、本心ヲ明ムベシ。

（沙石集）

⑧ 我が議には、まづこれらの説あらぬ事共なるいはれをことごとくに辨じ明らめて、次に、我行ふべしとおもふ所を議し、次には其法をしるして、すべて三冊の書にはなしたる也。（折たく柴の記）

⑨ 盗人にも五常の道を備へねばならぬ、といふ事有。（中略）又、盗人に入らんとする時、雨の降る夜か風の吹く時か、すべて其の折からはかりあきらむるは、智のよくねれる也。（ひとりね）

⑩ いにしへの安國の、やすらげき上つ大みよの、神の御代をも、知りあきらめてむものは、いにしへ人の歌なるかも。（歌意考）

⑪ 今一度そのところに索ゆきて、事の真偽を問ひあきらめ候となん（椿説弓張月）

近世になると、波線を付したように、知的な思惟や問いかけを表す動詞が前接するものが多く見られる。しかし、だからといって近世になって「あきらむ」の意味が大きく変質したわけでは決してなく、その萌芽はすでに④のような例に見られるものである。ただし、もし変化の面を重視するならば次のようなことが言えるだろう。同じ知ると言っ

も、単に事情・委細を知るといったことから、もう少し抽象度が上がり、事の意味や本質を問題にする例が多くなる。 「知る」ことの射程が深くなつたと言えるだろう。

「あきらむ」が「あきらめる」の意味を獲得するのは、遠藤氏も述べられているように、近世のことだが、その背景にはこうした「変化」があると見られる。近世には、次のような「〜と」を承ける例が多くなる。

⑫ 是は主の天罰とあきらめて、色済ますが。しこり博奕の榮耀とはさりとは小萬むごいぞや。

(丹波與作待夜の小屋節)

⑬ 五年このかた、はつちが身のためにもわるし、ぬしのためにもわるいと、たびたびあきらめて見ても、思ひ切れんせんものを、ほんに悪縁でおつしやうよ。(通言総籙)

⑭ けれど俺が見込んだらハテしよことがないにあきらめて、借して下され(仮名手本忠臣蔵)

⑮ 取り訳ておみつ殿。斯なりくだるも前の世の定まり事とあきらめて。お年寄られた親達の介抱頼むと言ひさして泣く音伏セ箆の面てぶせ。(新版歌祭文)

⑯ つれなき親とも思つらめ。皆是すくせの因縁とあきらめよや。(小林一茶 父の終焉日記)

⑰ 何事も國の為也と思ひ諦め給へかし。(椿説弓張月)

これらの例を見て分かるように⑫「天罰」、⑮「前の世の定まり事」、⑯「宿世の因縁」のように人間の力では避けようもないことが「〜」の部分に来ている例が多い。「あきらむ」は、事情・委細を知るといったことから、もう少し抽象度が上がり、事の意味や本質を問題にする例が多くなっていたが、そうした傾向のもと、こうした例が多くなっ

てきたのだと思われる。そうして「あきらむ」は、その意味を維持したまま、「あきらめる」の意味を獲得していったと考えられる。⑫～⑰の例はすでに「あきらめる」と解釈することができるが、基本的には「明らかに知る」という意味であると言える。詰まるところ、事態が自分の力の及ばない不可避のものとして知ることが「あきらめる」という意味と重なっているのである。これはまた、「思ひはつ」が「思いが行き着くところまで行ってそれ以外に考えられなくなる」という意味から「あきらめる」の意味を獲得した様相を想起させる。

⑱牛方の あきらめて行く にわか雨（誹風柳多留 二篇）

といった例になると、「あきらめる」対象が明示されていない。不可避のことであるとしても、そう抽象的な内容でもない。日葡辞書には、まだ「あきらめる」の意味は登録されていないが、近世になると、もうほぼ現代語と同じように使われるようになっていた可能性がある。

ついでながら、「あきらむ」と訓まれる「諦」字であるが、知られているように、この文字自体の意味は「明らかにする」「明らかに知る」という意味であった。ところが、「あきらむ」の意味変化によって元来の漢字としての意味とずれが生じた。しかしながら、ひきつづき「諦」字を「あきらむ」あきらめる」に用いた結果、「あきらめる」が「諦」字の国訓となったのである。「諦観」「諦念」という熟語ももとは「あきらめる」意味ではなかったのである。

四 観念する

次に「観念」「観念す」を見てみる。現代語では、次のように用いられている。

①百計尽きて、仕様がないと観念して、性を矯め、情を矯め、生ながら木偶でくの様な生氣のない人間になって了しまえ
ば、親達は始めて満足して、漸く善良な傾向が見えて来たと曰いふ。(二葉亭四迷『平凡』)

②雪国・越後ではこの時期、朝夕の底冷えが厳しい。ここで生まれて暮らす者の宿命と観念しているが、身にこたえる寒さがつらい。(読売新聞2005.02.06)

③小学校からの帰り道「甘柿を取って食べよう」と仲間、数人で木によじ登って食べていたら、所有者が現れ、木の下から大声で「下りて来い!!」と怒られた。逃げるに逃げられず、観念した。(読売新聞2006.3.21)

文章語であって、活発に用いられているとは言えないが、あきらかに「あきらめる」意味で用いられている。

この語もすでに知られているように、もとは「あきらめる」意味の語ではなかった。基本的には仏教語であったよう^④で、例えば次のように用いられる。

④欲作曼荼羅時。七日已前。於黄昏時。以敬仰心。観念諸尊。如對目前。(蘇悉地羯囉經十八卷)

心を澄ませて、眼前にあるかのように極楽浄土や諸仏を思い浮かべることで、深い知を得るということであるらしい。日本の文献にも、同様の意味で用いられている。

⑤「汝ら、今明、我に飲食を勧め、諸の事を問ひ聞かす事なかれ。我、一心に極楽を観念するに、他の思ひ出来れば、其の妨げと成る故也」(今昔物語集卷十五・八)

⑥ 其後、本意の如く、真言宗を申し立て世に弘む。其時に、諸宗の諸の学者有りて、即身成仏の義を疑ひて論を致す時に、大師、彼の疑ひを断たむが為に、清涼殿にして、南に向て大日の定印を結びて観念するに、顔色金の属にして、身より黄金の光を放つ。（今昔物語集卷十一・九）

⑦ 善導和尚の、定に入りて極樂を観念し給ひけるには、阿弥陀如来かならず道場に現じて、物がたりし給ひしついでに（宝物集 卷七）

⑧ 次に不浄を観ずべしと申は、我身も人の身も不浄なる事を観ずるなり。（中略）西施・南威がひとびたゑみし、みる人千金ををしまざりし、野の間、塚のほとりにすてられしかば、その姿にかはり、白き膚は青くくさり、赤き唇は黒く成て、（中略）つるに蓬がもとに塵となりて、残の骨のみあり。誰の心有人か是に着をなして、手とり口すひ床を一にせん。この観念をなすとき、無始生死の罪障消滅して、往生極樂の因を得る物なり。

（宝物集 卷六）

⑧ になると、観念の内容がやや具体的にになっている。と同時に「祈る」ことから「知る」ということに意味の重心が動いていると見ることが出来る。このような用法は世俗化するものの概ね近世まで変わらなかつたようである。『日葡辞書』の「Vocotaru」（念ふ）の項には「Oracio, I, quannemi vocotaru.（オラシヨ、または観念に怠る）祈禱や観念・瞑想を十分にしない（『邦訳日葡辞書』による）」とある。

⑨ ある僧喉痺にてハなく、喉をいためるあり。心やすき人の見舞、なにぞ物のたちて、くるしめるにやとハれけるに、さのごとし。さらハかやうの事よくまじなふて、いやす修行者あり、かれをさそひきたらんと同道せ

り。時になをす人、竹のおれかや、魚の骨かや、其物により観念かハれりと。僧息の下より、竹でハあらふずれども、まじなひハ魚の骨の心もちにて御沙汰候へと。(醒睡笑)

⑩「…畜類ながら心あらば、此理を聞き分けて、わが一命を助くべし。然るにおゐては、汝等が来世畜生道を除るべき経文を誦して報謝とせん。心なくんば只今餌食とせよ」と、眼を塞ぎて観念しゐけるに、前後二匹の狼、さしも悪獸なれども、此理にやふくしけん、怒れる気色引きかへ、忽ち頭をうなたれて、遙かあなたに退きしかば…(太平百物語 三四)

⑨⑩は近世の例である。世俗化しているものの、祈りの要素は残っている。⑩は、文脈上「あきらめる」の意味に解することもできる。

⑪一生の間、さまざまの戯れせしを、思ひ出して、観念の窓より覗けば、蓮の葉立を着たるやうなる子供の面影、腰より下は血に染みて、九十五六程建ち並び、声のあやぎれもなく、「負はりよ、負はりよ」と泣きぬ。「これかや、聞き伝へし孕女なるべし」と、気を留めて見しうちに、「酷い母様」と、銘々に恨み申すにぞ、「さては、昔、血下ろしをせし親なし子か」と悲し。(好色一代女 卷六)

⑫「一生の一大事は也。よくよく観念して、未定めなき作藏なれば、かり首に珠数を懸させ、跡に残して誰にとらすべし、惜まず共日外とらしたる緋繪子の犢鼻褌かゝせ」と申せば…(好色一代男 卷八)

⑬は自分の一生を静かに思い起こすと、九十五六人の墮胎した子があることに思い至ったというものである。西鶴のパロディ色も強いが、「観念する」の知る側面への傾きがかなり明確である点は注目しておきたい。⑭の「作藏」は

男性器で、それが切断されるかもしれないという男にかけたことばである。「ことの重大性をよくよく認識して」といった意味と解される。これらの例では重大なことをよく知る、認識するといった意味に使われていると考えられる。

⑬ 今まで待ちぼうけになったれども、一目逢へば色これ本望、末頼ない契なれば、是限りと逢ふ度毎の観念今更溜めていふ事なし。（重井筒）

⑬は近松の例だが、次はいつ逢うことができるか知れない境遇にあることを知るといふことである。

このように、「観念する」は、当初持っていた祈りの側面を薄めながら、知る側面に次第に比重を移してきたのだと考えられる。ただし、悟りの境地とも言える深い知を得るといった、元来この語のもつ抽象性は、知る内容に少なからず影響をもたらしている。ただ何かを知るというのではなく、世俗的とはいえず、運命や置かれた境遇など、人では動かしようのないような重大な内容を知ることが、「観念する」という語で語られている。こうした意味のあり方は、先に見た「あきらむ」と非常に似ている。実際、⑫や⑬はすでに「あきらめる」ないしは「覚悟する」といった意味を持っていると解することができる。

五 覚悟す

この語も、「あきらめる」と接点をもつ。まず、現代語の意味を整理しておきたい。

①最初は、このプロジェクトが成功する見込みはゼロだと覚悟した。

(<http://www.cio.jp.com/contents/?id=00003064;t=18>)

② スーパーにずらりと並ぶ商品は内外いずれか戸惑う物ばかり。国産のもので野菜は何らかの消毒は免れないだろう。モヤシもある時期、脱色はしないといっていたのに、いままた真っ白になって並んでいる。時代が時代だから覚悟して食べているが、もう観念くわんねんするしかない。ただ、小さい子供たちの将来を考えると、暗い気持ちになる。(読売新聞1992.12.02)

③ 工藤も甲子園での試合という重みを分かっていたのだろう。六回は1点は覚悟したが、よく頑張ってくれた。(読売新聞2006.05.04)

④ 民主党は国民の皆さんの期待にこたえて、来るべき参議院選挙に勝利し、小泉政権を打倒する覚悟であるといふ強い決意を申し述べまして、私の質問を終わります。(2004.05.26.国会本会議)

現代語の「覚悟(する)」は、「あきらめる・断念する」とびったり重なるとは言えない。予め心の準備をしておくこと、決心を固めることにも用いられる。①②は望ましい事態が実現しないと知ることに重点があり、③は望ましくないことの実現しないようにコントロールすることができない状況を認識し、望ましくない事態の実現を受け止める心の準備をする点に重点がある。④は「あきらめる」からはかなり遠くなっている。固い決意をしたという程度のものだが、良い結果が得られない場合失う物が大きいことを認識した上で決意を固めたということが背景にあるのである。その意味では①③とつながりはある。③までは「あきらめる」の語義の中に収まるもので、④は「覚悟する」独自のものと考えられる。実際、これまで見てきた語彙の中にも「思ひきる」や「観念する」に「覚悟する」③と近い意味の例が見られた。

さて、この語も元來は「あきらめる」意味をもたなかった。

⑤ 郎従小庭に祇候の由、全く覚悟仕ず。但近日人々あひたくまるゝ子細ある歟の間、年来の家人事をつたへ聞く歟によつて、其恥をたすけむが為に、忠盛にいられずして偷に參候の条、力及ばざる次第也。

（平家 卷一 殿上闇討）

これは、平忠盛が、昇殿を許された際に反感を持つ貴族からの襲撃を心配した郎従がひそかに小庭に入っていたことを、言い訳することばである。ここでの「覚悟す」は「認識する」といった意味であろう。この語は仏教関係でも用いられることばであるが、必ずしも仏教語とは言えないように、漢籍の史書にも比較的多数の用例が見られる。⑤で仏教との接点を見いだすことは難しい。ただし、ここには「歟」が非常に意識的・効果的に用いられているように、詮議に対して、やや莊重なことばづかいがなされている観がある。単に知るというのではなく、重要性を帯びたことを認識するという意味であったと考えられる。

⑥ 古語に「一生のはかりごとは、つとめにあり」といへり。つとめざれば、万の事行はれず。身を立つることかたし。又、一生のつとめはわかき時にあり。人の身をたつるはかりごとは、三十歳の内に覚悟すれば、一生の家業成立つ。その内、覚悟なく怠れば、一生立ちがたし。（貝原益軒 大和俗訓 卷七）

⑦ なぜに命が惜しいぞ二人死ぬれば本望。今とても易いこと分別据ゑて下んせなう。詞ヤレ命生きやうと思つて此の大事が成るものか。生きらるゝだけ添はるゝだけ高は死ぬると覺悟しや。（冥途の飛脚）

これらは近世の例である。⑥は「身をたつるはかりごと」を認識するといった意味である。これは、しかし、重大な

ことを認識するということである。先にも述べたが、基本的には「覚悟す」は漢語ということもあり、単に「知る」というのではなく、一定の重要性のある、抽象度の高い内容を知ることが中心であったと思われる。そして、そこに「あきらむ」「観念す」との共通性があったと考えられる。その結果、「あきらめる」という意味にも参入したのだと考えられる。

六 諦観（あきらめ）語彙の意味

以上見てきたように、日本語では、あるところで思いを限定し、あれこれと物思うことを打ち切る意味の「思ふ＋X」の形の複合動詞がまず「あきらめる」意味を担った。その後、近世以降「あきらむ」「観念する」「覚悟する」など、ある重大なことを知るといふ意味の語が「あきらめる」意味を担うようになった。これらを展開の図式上媒介するのは「思ひはつ」の存在である。「思ひはつ」は、「思い」（＝考え）の果てにある結論にたどりつくというもので、他の「思ひ＋X」と接点を持ちつつ、「知る」ということにおいて「あきらむ」以下の語とも接点をもつのである。「思ふ＋X」の語彙は、「あきらめる」という意味をもっぱら表すものではない。「思い」の長さ、「思い」の結果の重要性などによって、文脈的に「あきらめる」という解釈を受け入れるといったものであった。近世から近代の様相をもう少し精密に観察する必要を感じるが、「あきらむ」「観念す」「覚悟す」によって、諦観（あきらめ）をより明示的に表すようになってきたということができよう。

なお、次のような指摘がある。

本来、恥意識は、人に非難されることを先取りして、自分で自分を非難するという自罰による一種の自己防衛の機能を持っている。それは意識的あるいは無意識のうちに、自罰の欲求が発動するからであり、自罰とは結局、他罰の先取り、先廻りなのである。自罰は他罰を先取りすることで、他罰そのものを回避しようとする。（中略）

このように、自罰は、先制攻撃ではなくて、先制防衛のはたらきをする。日本人には、この自罰傾向が西欧人にくらべて強いのではないかと思われる。（南博『日本的自我』岩波新書）

「明らかに知る」ことが「あきらめる」ことになるというのは、右のような指摘を想起させる。我々が取り越し苦労的に先のことをいろいろ考えて、先制防衛として「あきらめ」しているとすれば、それは問題である。先のことを考えないのは無謀であるが、先のことはわからないのが基本である。現在において、あまり先のことを限定して考えるのは、消極性を帯びやすい可能性がある。就職活動において学生が自己分析をさかんに行う。もちろん、自らを省みることはプラスの面も多かろう。しかし、自分のことは自分が一番よく知っているというのは必ずしも真とは言えない^⑤。潜在的能力を見いだすのならいいのだが、あまり分析しすぎると害があるのではないか。「知る」ことが「あきらめ」につながりやすいかもしれないからだ。ただ、諦観（あきらめ）語彙の面白いところは、「覚悟する」に見られるように、マイナスを受け入れることによって、すなわち「あきらめ」を経ることによって、いわば「先制攻撃」の態勢に入るといふ道筋もある、ということを覚えてくれる点である。

ある意味領域に参入してくる語の意味の共通点にまずは着目し、相違点も考慮に入れることによって、当該の意味領域がどのように捉えられてきたのかということが、個々の語を扱った場合よりも明確に浮かび上がってくる。以前、

「忍耐語彙」について同じような方法で考えたことがあるが、本稿では、諦観（あきらめ）語彙について考えてみた。忍耐の場合に比べて参入する語彙の性格に時代よる変化があるように見受けられた。諦観（あきらめ）の場合、思いの断止というものから、「知る」ことによる閉塞感にゆるやかに変化したというふうに見える。

(1) この節を書くにあたって、相良亨『日本人の心』（ペリカン社）を参考にした。理解の責はもとより私にある。

(2) 本稿では触れ得ないが、「見かざる」「見きる」も諦観（あきらめ）語彙と認められる。

是非にみきれとはつらし。是が見かざるゝ物か（好色一代男 六卷）

「見切る」は、見ることを切ることから「あきらめる」の意味を獲得したのか、十分に見て（知って）ということから「あきらめる」意味を獲得したのか今のところ判然としない。『日葡辞書』の「Miquin（見きる）」の項には「何か物を十分に見る、あるいは、すっかり見て取る」という語釈がある。「思ふ+X」の動詞が「あきらめる」意味を獲得している経緯から見て、どちらの道筋もあり得ると思われる。なお、「見る」という動詞の性格から、これらは他動詞的な性格が強い。

(3) 遠藤好英「あきらめる」〔講座日本語の語彙〕 一九八三、『あきらめる』の語史―古代における文章史の様相―〔日本文学ノート〕 一九号 一九八四、「あきらめる―明らかにする・断念する」〔日本語学〕 一五卷三号 一九九六 参照。

(4) 久山善正「観念のたよりなきにしもあらず」の解釈〔池坊短期大学紀要〕 一〇号 一九八〇、佐藤喜代治『日本の漢語』（角川小辞典 一九七九）、片野達郎「観念」〔講座日本語の語彙〕 一九八三に詳しい。

(5) 下条信輔『サブリミナルマインド』（中公新書）、菊地聡『超常現象をなぜ信じるのか』（講談社ブルーバックス）参照。

(6) 拙稿「忍耐語彙考」〔国語語彙史の研究〕 二七 二二〇〇八

〔付記 本稿は二〇〇八年五月三十一日の「神戸松陵土曜講座」で延べた内容大幅に加筆修正を施したものである〕